佳作

語り継ぐこと

宮城県気仙沼市立階上中学校
１年　角野　紗也

10 年後、20 年後、30 年後……。私の住む町はどうなっているのだろう。今 13 歳の私には想像すらできない。しかし、未来の自分に、未来の気仙沼に伝えたいことがある。

私は４歳の時、父の仕事の都合で、北海道から気仙沼に越してきた。震災から３年が経過した頃である。新しい道路や建物が建設され、津波の跡はほとんど残っていなかった。休日は近くの海で、家族と海水浴を楽しんだ。ゴーグルをつけて海に潜ると､海の底まで見える透明さにはしゃいだことを覚えている。この穏やかで美しい海が､黒い魔物となって町をのみ込んだ事実を知ったのは、小学生になってからだ。

私の家の近くに、被災した高校の校舎がある。４年前、その校舎は、震災の教訓を後世に伝えるために「気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館」という形で生まれ変わった。

初めて伝承館を訪れたのは、小学校６年生の時だった。津波で破壊された校舎や、折り重なった車がそのままの形で展示されていた。映像シアターでは、黒い津波が押し寄せ、建物も車もあっという間にのみ込まれていく様子が流れていた。私の知っている気仙沼は、そこにはなかった。私はそこで、初めて「語り部」の存在を知った。その時は、震災を経験したお年寄りの方々が、当時の様子を話してくれた。

再び伝承館を訪れた時、私は中学生になっていた。その時、語り部として私たちに接してくれたのが、中学生や高校生の先輩だった。歳が近いということもあり、親しみやすく、分かりやすい説明だった。自分の体験やその時の思いを語ってくれ、共感することも多かった。観光客の方とやりとりしながら堂々と話す姿に憧れた。帰り際、

「語り部に興味のある人はいませんか。」

伝承館の方の言葉に、私は思わず手を挙げていた。そして、私も語り部の一員となったのだ。

しかし、私には不安があった。震災当時、私は１歳。記憶はない。しかも、気仙沼出身でない私が、気仙沼の震災のことを話せるのだろうか。そもそも私は人前で話すことが苦手なのだ。考えれば考えるほど、不安で胸がいっぱいになった。

私には同じ語り部として活動している友人がいる。彼女はいつも積極的だ。
「人前で話すのって緊張しない？」
「うん。初めは緊張するけど、慣れてくるとだんだん楽しくなってくるよ。一緒に頑張ろう。」
――そんなもんかなあ、半信半疑の私。伝承館の方が言う。
「紗也さん、もっと自信持って言ったほうが相手に伝わるよ。」
そんなこと言ったって……。やっぱり私には無理……。
そんなある日、先輩の語り部の様子を見学したときのこと。お客さんに、
「そのとき、あなたは何歳だったの？　記憶はあるの？」
と尋ねられた先輩は、こう答えた。
「幼稚園児だったので記憶は少ししかありません。でも、体験者の話を聞いて、分かったことや感じたことを、自分の言葉で伝えるようにしています。」
――そうか、震災を知らなくても伝えることはできるんだ！
語り部の先輩方は、皆強い思いがある。それは、自らの体験を通して、災害から多くの命を守りたい、という思いだ。その思いが、お年寄りから高校生、中学生へと、世代を越えて、しっかりと受け継がれているのだ。
――私もその一人になりたい！
この先、震災を知らない世代が語り部を受け継ぐことになる。今の私にできることは、経験者からしっかりと学び、それを次の世代に伝えていくことだ。
私は、伝承館を見学した人に、震災を「怖いもの」というイメージだけで終わらせてほしくない。語り部として、当時の出来事や今に繋がる人々の思いを、私の言葉で語り継ぐことで「自分事」として考えてほしいと願っている。
今年の夏、気仙沼の海水浴場は地元の子どもたちや大勢の観光客でにぎわった。伝承館前の広場では、お年寄りの方々がパークゴルフで汗を流している。そんな気仙沼の笑顔を、いつまでも守りたい。だから、私は私にできることを続けていく。
未来の気仙沼を想像しよう。過去の記憶は絶えることなく語り継がれていますか。私は語り部として、震災の教訓を伝え続けていますか。命の大切さを忘れていませんか。